

## 中東フリーランサー報告

(第29回)

中東フリーランサー

### <目次>

1. サウジアラビアで遂に水着ショー
2. 70分の1に短縮？The Line プロジェクト
3. 「オイルダラー」よ永遠に！
4. MbS の野望に対抗する？UAE の親米 AI 戦略転換

—————\*—————\*—————\*—————

今年もハッジ(大巡礼)が始まりました。ご存じの通り毎年 2 週間ずつ前倒しになるハッジですが、このところは真夏の中で行われます。そして心配したとおり、50 度を超える酷暑の中で 1300 人以上が「熱中死」しました。250 万人が殺到するハッジでは毎年のように犠牲者が出ており、ハッジ最後ミナのジャマラット橋での「投石の儀式」では、2015 年に 2300 人が「圧死」しました。今回の死者も半端ではなく、まさに 10 月 7 日の「ハマス急襲」のイスラエル側犠牲者数に匹敵します。

ハッジはこのように危険な要素もあるので、サウジ政府は毎年巡礼者数を制限し、各国毎にビザを配給していますが、抜け穴は多く、今回も死者の 8 割は無許可の巡礼者で、殆どが陸続きのエジプトからとの事。「メッカを見て死ぬ」と言う標語はありませんが、ハッジでの死が神の恩寵に預かれるのかどうか(本望なのか)、このところはムスリムの皆さんに聞くしかありません。

ちなみに私はクウェート駐在時には何度も 50°C 超を経験しました。気温は湿度と相反するので、湿度が高いドバイではなかなか 50°C にはなりません。ちなみに、観測史上世界最高気温は、クウェートの隣、イラクのバスラでの「58.8°C」と言うのが有名ですが、これはどうも諸説あるようで、藤部文昭氏の「気象談話室」に詳述されています。

[https://www.metsoc.jp/tenki/pdf/2013/2013\\_02\\_0037.pdf](https://www.metsoc.jp/tenki/pdf/2013/2013_02_0037.pdf)

ただ、正直言って 45°C 以上となると、体感では違いがわかりません。そして特に危険なのが、汗が即座に蒸発(昇華)してしまうので案外さっぱりしており、あまり暑く感じないことです(家内は、クウェートの方が女性には楽だと言っていました)。この為、気がついたら熱中症になっている可能性が大です。かつてサウジの若い王族が、砂漠の真ん中で自動車がエンコし(死語?)、携帯電話も無かった時代なので、発見された時には「ドライプリンス」になっていたと言う現地紙記事を読んだ覚えがあります。今回のハッジの犠牲者も、恐らくそうした手遅れ状態だったのでしょう。

さて、そんな暑さを吹き飛ばす？「爆弾ニュース」が今回飛び込んで来ました。

## 1. サウジアラビアで遂に水着ショー

「中東フリーランサー報告」としては、このニュースは放っておくわけにはいきません。と言うか、私の長い中東経験で一番ショッキングなニュースです。5月17日、「サウジアラビアで水着ショー」と、俄かには信じられないと言うか、MbS 改革も遂にここまで来たか！？と言う記事がメディアを飾りました。場所は NEOM 開発のひとつ、紅海沿岸のウンマハット島にある5星ホテル「セントレジス」のプールサイドです。MbS 皇太子のビジョン 2030 の目玉としての NEOM 開発では、北部紅海沿岸に超高級リゾートを次々と建設して来ましたが、写真を見て、すでにここまで観光客が押し寄せていることにも正直驚きました。実際サウジ中銀統計では、今年1-3月のインバウンドの支出は120億ドルで、前年同期比22.9%の増加(日本は115億ドル相当!)。アウトバウンド支出との差額は64億ドルの黒字で、前年同期比46%増となっています。確かにオンライン旅行予約サイトなどでは、既に目玉観光地として定着しつつあります。



この水着ショーの仕掛け人は、サウジ発のアパレルブランド「ヤスミナ Q」を立ち上げたモロッコ出身の女流デザイナー、ヤスミナ・カンザル(下写真)です。ロンドンとジェッダを拠点に活動する彼女のモットーは「サステナビリティ」。「地球に優しい生産方法と、デッドストックの生地を使用したフェミニンなアイテムの提供」を基本ポリシーに、「今日ブランドを始める人は誰でも、環境への影響を考慮し、地球を守るために変化を起こすよう努める責任と注意義務がある(ヤスミナ)」との主張で、デッドストックの生地の活用で新しい生地の生産を抑え、不可能な場合は FSC (森林管理協議会) 認証を受けている生地のみを採用すること。当然ながら過剰在庫を防ぐために生産



量も厳しく管理し、WRAP(世界最大の繊維産業向け認証プログラム)認定の地域密着型メーカーとのみ提携するとの徹底ぶりで、「私たちは常に学び、適応しながら進んでいる(ヤスミナ)」と意気軒高です。なにやら流行のキャッチフレーズを並べ立てただけのような響きもありますし、そもそも会場となった NEOM の「紅海グローバル」リゾート群こそ過剰観光在庫

(2050年までにリゾート50か所を開発予定)では?とのツッコミも聞かれそうです。しかし無駄のないミニマリズムは砂漠の遊牧民本来の伝統でもあり、まずはこうした意識を口にするこそ、

環境への取り組みの初めの一步と言えるもので、これを口先ばかりと軽く見ていると、気が付いたらこの若きデザイナーが世界のアパレル界の先頭を走っているかも知れません。ちなみに、2022年のサウジのファッション産業は125億ドルで、GDPの1.4%、23万人の雇用を生んでいるとの事です(サウジファッション委員会)。

今回水着ショーが行われたウンマハット島にあるセントレジスホテルはマリオットホテルチェーンの最高級版ですが、「紅海グローバル」リゾートには、世界の超高級ホテルブランドが雲集しています。実はジェッダより北の紅海沿岸はサンゴ礁の宝庫。それゆえに古代には紅海を遡る船は座礁を恐れ、ジェッダの対岸スーダンのスアキン港で荷物を下ろし、陸路ナイル河畔のアトバラまで駱駝で運んだものでした(左地図)。



茫漠たる沙漠の果てに潜む海中のパラダイスは、エジプトシナイ半島のリゾート、シャルムエルシェイクの繁盛を見てもおわかりのとおりです。NEOMの観光立地自体も極めて合理的なのですが、これに対する今までの西側の懐疑的視線は、サウジアラビアと言うイスラム教国家の厳格な閉鎖社会へのネガティブイメージと、交通インフラの欠如ゆえだと言えます。今回の水着ショーが、都心の閉鎖された会場のキャットウォーク上ではなく、敢えてセントレジスホテルのプールサイドで敢行された理由がそこにあると思われるのです。

ニューズウィーク紙をはじめ西側メディアは、水着モデル達が「肩を出している」「一部はお腹も露出」などと興奮口調で、まるで80年近く前のビキニ水着登場時(1946年:同年のビキニ環礁原爆実験にちなんだ命名。洋楽「ビキニスタイルのお嬢さん」を思い出せる方は70代以上)の衝撃のような扱いですが、まさに欧米ジャーナリズムのサウジアラビアに対するステレオタイプの認識を露呈した恰好です(この点では私も同類ですが・・・)。

そこで少し落ち着いて? 今回の水着ショーのインパクトを考察してみましょう。写真を見ると観客が男女同席です。まずここが重大なポイントです。女性客だけであれば、こうしたイベントは以前も有り得ました。紅海グローバルでは当初からプールは男女開放されているのですが、HPには写真掲載が憚られた。それを水着ショーと言う話題性で西側メディアに報道させる



ことで、一気に世間に報せたのではないのでしょうか。そして男性がスマホで撮影している姿も異例です。家族以外の女性(ましてや水着姿)を撮るなど論外で、街中でもアバヤ姿の女性を撮影するなど危険を伴います。このように、お客の姿に、サウジのタブーの崩壊が表れているのです。

一方プールサイドだと言うのに、観客には水着姿が一人もいない。はたしてサウジ人客がどれほどいるのか。アバヤ姿の女性がいなくて見ると、インバウンド客ばかりなのかも知れませんが、皆さんどうも服装があか抜けない(失礼)。それに冒頭の写真など、観客は黒髪ばかり。白人客は殆どおらず、南西アジアかアラブ富裕層の人々が中心ではないかと思うのですが(経験に基づく推測ですが)。そしてプールサイドと言う露天のイベントであることも、同時期にメッカで 1300 人が熱中死した事実を想起すれば、同じサウジアラビアでも紅海リゾートの過ごしやすさのアピールにも繋がります(ただし暑さ慣れした人達である可能性も考慮)。

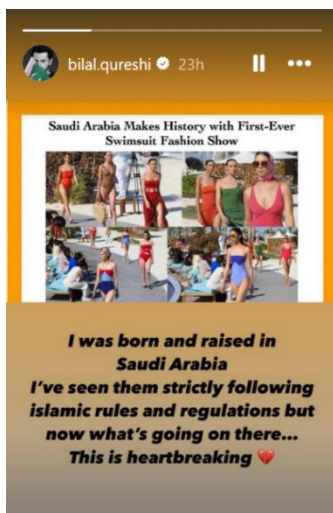
つまり、NEOM の当面の集客対象は周辺イスラム地域の観光客ではないのでしょうか。今までこうした富裕層の行先はレバノンやエジプトでした。ガザ戦争やテロなど、こうした国々はきな臭くなっており、それに比べて治安上も別天地のパラダイスリゾートは、この地域において、今や貴重な存在です。昨年 9 月には近未来的デザインの「紅海国際空港(下写真)」も開港し、ドバイからもフライドバイの直行便が就航しましたが、欧米からはまだありません。



旅行者にはこれまた新機軸の観光ビザが発給され、「スマートラゲージ」で来客は手荷物を先行リゾートの客室で受取り、また返送できるというハンドフリーシステムです。徹底した高級志向で単なる数を狙うのではないこともドバイとは異なる戦略ですが、治安対策上も含め、まずはレピュテーション確保を優先する姿勢はある意味堅実で、かつしたたかです。

ここまで開放が進んだとなると、残るはアルコールと豚肉解禁かと期待されますが、そこまではまだ踏み込めてはいないようです。それに当面の顧客層が周辺地域国であるとすれば、敢えて解禁を急ぐ必要も無いでしょう。「ビジョン 2030」では、観光産業の推進をウムラ(小巡礼:季節を問

わない)の奨励と結び付け、安定した来客確保による観光産業雇用維持を目指していますので、西側の来客誘致は今後のテーマで良いのではないのでしょうか。



しかし、MbS の挑戦も、決して歓迎一色とはいかないようです。果たして他のイスラム諸国の中には激怒する者も多く、中でもパキスタンの反応は過激です。同国の著名な俳優でサウジ育ちのビラル・クレシは、自らのインスタグラムで「イスラム教徒として、サウジアラビアで今何が起きているのか、そしてそこで西洋文化がどのように推進されているのかを見ると、心が痛む。」と慨嘆したことが、パキスタントゥデイ紙で紹介されました(左写真)。パキスタンでは有名人の社会的影響は多大です。ただ、敬虔なムスリムであるはずの彼が、インスタグラムにその「セミヌード」の女性たちの写真を敢えて掲載しているセンスは、ちと理解しがたいところでもあります。が・・・。

一方サウジアラビアと関係正常化を果たしたイランのコメントも聞こえて来ません。自国ではアバヤ着用強制を巡っての女性の死が、全国的市民デモに繋がった次第ですから、一言あっても良さそうなのですが、目下の大統領選挙でそれどころでは無いのかも知れません。

いずれにしても、女性の肌の露出はイスラムの教義の根幹にも関わるところです。UAE のルーブル美術館でも女神像展示を遠慮したように(これは別の意味での宗教問題もあったが)、取り扱いには相当に慎重です。実際にはクウェートなどでもプライベートクラブは全く「西側基準」になっていますが、これも敢えては言わないだけの話。それをビジョン 2030 に絡めて政府お声がかりの開放路線を表立って強調するのがどういう影響に繋がるのか、正直判断がつかえません。狂信的なテロが起きなければ良いがと願うのは私だけでしょうか。実際イベントに参加したフランスのインフルエンサー、ラファエル・シマクールベは、自分の目には危険なことは何もなかったが、サウジの状況では大きな成果だったと語った一方、「今日それをするのはとても勇気のいることなので、参加できてとてもうれしい」と語っています。

## 2. 70 分の 1 に短縮? The Line プロジェクト

さて、サウジ初の水着ショーについてページを蕩尽してしまいましたが、会場である紅海グローバルも一部である NEOM が資金難に陥っているとのニュースが 4 月頃から飛び交っています。発端はブルムバーグの報道ですが、特に影響を蒙るのが、あの「The LINE」プロジェクトです。鏡に覆われた 500m 高のビル 2 棟が、直線 170 km に伸びる 150 万人都市が、たった 2.4 km の 30 万人都市に短縮されてしまうと言うのです。距離は 70 分の 1、逆に人口密度は実に 15 倍増! 事実だとしたら大きな退化です。一部のコントラクターはレイオフを始めた由 (New Civil Engineering 誌)。

サウジ政府はこの報道に猛反発し、政府高官は計画に変更は無いと強弁しています。ただし同プロジェクトはモジュラー単位の建設であり(これは事実)、完成まで「長期のプロジェクトになる」と、工期の長期化を暗示しており、徐々にゴールポストを動かしているような印象を与えます。

もっとも私に言わせれば、The Line プロジェクトをいきなり全区間建設と言う方が狂気の沙汰です。かように前代未聞のプロジェクトの立ち上げには、居住者の生活動向も含め、パイロットプラントが当然でしょう。プロジェクトマネジメントの雇われ外人たちには、そのような進言は不可能だったのでしょうか。右写真は The Line の CEO ギリス・ペンドルトンが 2 月に公表した航空写真です。延々と伸びた土木掘削作業は、まだ「ナスカの地上絵」状態ですが、これに 500m 高の鏡のビル壁が立ち上がれば、まさに現代の万里の長城となるでしょう。イランが攻めて来た時の防壁にするのでしょうか。この土木作業には、毎週 200 万㎡の土砂を運搬するために、260 台のエクスカベーターと、2000 台の大型ダンプが日夜稼働しているとのこと。



170 km という距離は、東名高速道路で東京・静岡間に匹敵します。NEOM ではこの間を超高速交通が 20 分で結ぶ予定ですが、2.4 km に短縮されては実験もままならないでしょう(東京・汐留の距離)。ちなみに日本のリニアモーターは品川・名古屋間(南アルプスルート)286 km、40 分ですから、NEOM の交通手段は、平均時速でさらに速いシステムです。コストがいくらになるかは掴み切れませんが、建設自体は路線途上に某知事のような邪魔者がいないので、日本よりはるかに容易です。ただ、反対者がいない訳ではなく、予定地に居住するハウエイタット族(「アラビアのロレンス」でアンソニークインが演じていた部族)は移住に抵抗した結果、族長一族の 3 名が死刑判決を受け、その内のひとりアブドル・ラヒム・ホウェイタットは特殊部隊に射殺されました。(結局計画が 2.4 km に短縮されたのであれば、なおさら無駄な死と言うことになるが・・・)

こうした強権発動がサウジアラビアの脱皮への努力に暗い陰を落としていることは否めません。水着ショーに象徴される MbS の開放政策も、物珍しさのキワモノ的な扱いにとどまり、結局最後は「カショギ事件」を引き摺り出し、「殺人者の王子」の烙印を消したくない西側メディアの報道姿勢は、まだまだ変わりそうにもありません。

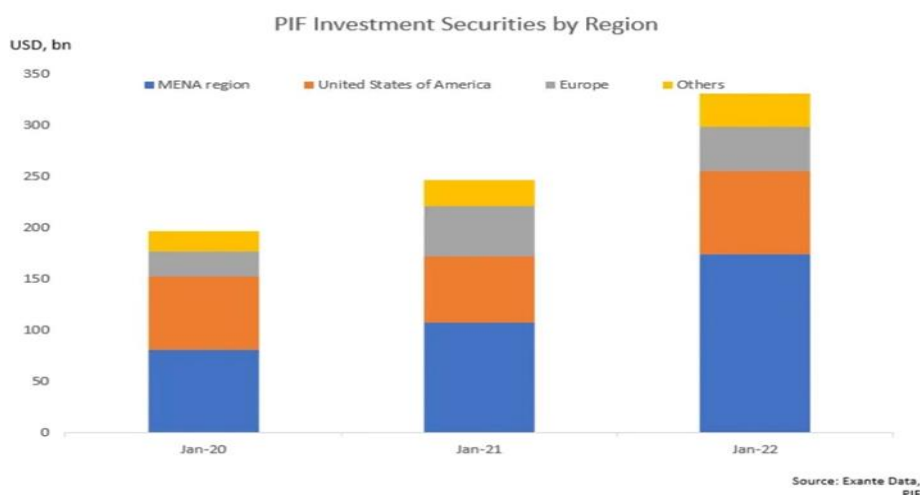
### 3. 「オイルダラー」よ永遠に！

サウジアラビアの資金不足ですが、NEOM のスポンサー PIF の流動性低下はかなり顕著で、昨年 9 月には 150 億ドルにまで落ち込んだと報じられています。油価の低迷も影響していますが、

一方で UAE に対抗して不動産市況を盛り上げたいサウジアラビアにとって、今までのような国内の銀行への依存が憚られる状況であり(政府の借入れの 6 割は国内市場から)、資金調達には外債発行か虎の子サウジアラムコの株式売却ぐらいしか見当たらず、これを以てサウジアラビアは追い詰められたと揶揄する向きも出て来る始末です。

しかし、PIF は民間のファンドとは違う SWF です。これは GCC 他国の SWF と同じで、強欲投資家が背景にいる訳ではなく、投資案件は貯金に近いところがあります。9,400 億ドルあったと言われる原資も、言わば現物に置き換わっただけで、いざとなれば現金化すれば良いと言う発想です。その意味では PIF が石油収入をオルタナティブ投資に運用する方向性は理に叶っています。

PIF についての朗報は、英国のコンサル「ブランドファイナンス」が世界のファンドと SWF のブランド力評価を行い、投資案件の話題性なども含めた PIF のブランド価値を 11 億ドルとして、ADIA (6 億ドル)他を差し置いて SWF 中の随一と評価したことです。ちなみにファンド部門のアセットマネジメント力第 1 位にランクされたブラックロックと PIF は、サウジ国内に投資ファンド「ブラックロック・リヤド・インベストメント・マネジメント(BRIM)」を立ち上げ、PIF が最大 50 億ドルを出資するとの提携(4 月 30 日)が話題になりました。ブラックロックのラリーフィンク CEO の発言では、サウジ国内のエネルギー投資、インフラ投資などを、同社が今後注力するオルタナティブ投資の目玉とする考えとのことですが、これはまさに PIF が進もうとしている方向と合致しています。



とは言え、PIF が投資するビジョン 2030 のリゾート事業は、The Line はもちろん、巨大なテーマパーク群も(「ドラゴンボール」もあり)、多数の超高級ホテル群も、さらには e-スポーツワールドカップも、いざと言う時(サウジアラビアの外部環境悪化の際)に簡単に現金化する訳にはいかないでしょう。昨年 9 月にオープンした米 Lucid の EV 工場(@ジェッダ; 下写真)の方が、米国との結び付きも含め、いざと言う時の現金化(資産リサイクル)も可能で、サウジアラビアの産業多角化へのインパクトも大きいと思うのですが、如何でしょうか(始まったばかりの事業に資産リサイクルの

話など不謹慎ですが・・・)。



ちなみに LUCID の新工場は、米国の(第一先進生産工場:AMP-1)に次ぐものです。当初は年産 5000 台の CKD からスタートし、将来的には一貫生産工場として、年産 15 万台を目指します。LUCID は 2018 年にサウジ国内生産を条件に PIF から 100 億ドルの出資を受け、今や PIF が 63%の株主となっていますので、もうサウジ企業と呼ぶべきなのでしょう。しかし米国人は米企業と主張して譲りません。欧米が中国 EV を警戒する中、ではサウジ製米国 EV ならどうなのかと言う点、「もしトランプ」が現実となり、サウジ・イスラエル国交正常化をゴリ押しする延長線上で、サウジ製 LUCID 車を EU に売り込む(押し付ける)安請け合いをしたらフォン・デア・ライエンはどんな顔をするだろうか等々、11 月以降に向けて、今から暗い夢想をしている次第です。(もっとも EU も中国との合併事業は容認しており、ステランティスが中国 EV の域内生産を発表。)

ビジョン 2030 では、2030 年までにサウジ国内の自動車脱炭素化比率 30%を目指しています。その時の自動車数予想は 1,650 万台とのこと。目標達成には 500 万台近くの EV や水素車が必要となり、LUCID のフル生産だけでは 30 年もかかってしまいます。一時テスラのサウジ国内生産も噂されましたが、これはイーロン・マスクが否定しました。一方2年前に、PIF は鴻海(Foxconn)と EV「CEER」の国内開発に合意しましたが、その後の進展はよく見えず、今年やっと工場着工に至ったとの報道が最後です。プラットフォームは BMW、駆動システムは現代自動車、製造自動化システムはシーメンスと言った寄せ集めで、これでまともな車が出来上がるのか心配ですが、「だからサウジは・・・」的な象徴にならないことを祈ります。ビジョン 2030 目標達成のためには、サウジ政府は結局 EV 輸出どころか輸入が必要ですが、その場合中国製 EV を容認するかどうか、それが中国製テスラであつたら良いのか等々、今後の動向に目が離せません。

ところで、ブルムバーグのコラムニスト、ジャビアー・ブラス氏の記事で知ったのですが、今年の 6 月 8 日は、第一次石油ショック後に石油と米ドルを結び付けた、所謂「オイルダラー」の起源である「米国・サウジ経済協力合同委員会」設立に繋がった米サ会合の 50 周年に当たるのだそうです。



当時のサウジアラビアのあり余る石油収入を米国債で回収するのと引き換えに、サウジの安全保障を米国が請け負うと言う、正に中東現代史を形成した秘密の(その割には有名な)ディールですが、ブラスの記事は、その 50 周年の 6 月に「オイルダラー(ペトロダラー)が消える」と言う噂が金融界を駆け巡り、「ペトロダラー」のグーグル検索が瞬間的に沸騰した事態を受けてのものでした。その中で示されたサウジアラビアの経常収支の GDP 比のグラフが印象的でしたので以下に引用させて貰います。ブラスの結論は、「サウジアラビアの石油収入が米国債に流れ込む構図はもう無い。サウジの石油が米ドルを支えたのはもう過去の話。しかし石油は相変わらず米ドルで取引され、他国通貨(元とかルーブルとか)に置き換わることは難しい。それが米ドルと米国の強さだ。」と言うものです。アスタナで会合中の習近平とプーチンが聞いたらどんな顔をしたでしょうか。

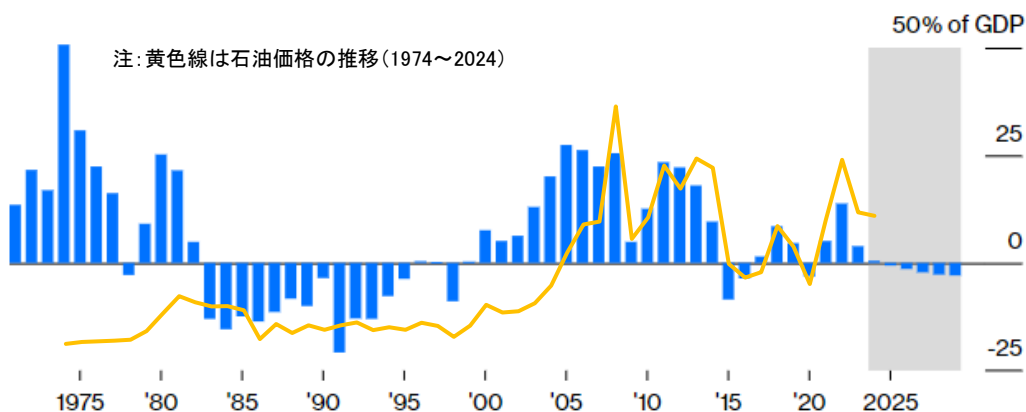
「オイルダラーよ、永遠に！」

<https://www.bloomberg.com/opinion/articles/2024-06-27/the-petrodollar-is-dead-long-live-the-petrodollar?srd=homepage-americas&sref=U3dOGIDF>

### The Saudis Don't Have Petrodollars

Saudi Arabia has seen its current account surplus plunge from the all-time high of more than 50% of its GDP in 1974, when the petrodollar was born.

■ Forecast



Sources: International Monetary Fund and World Bank

#### 4. MbS の野望に対抗する？ UAE の親米 AI 戦略転換

さて、サウジアラビアの不動産事業のブームがサウジ政府の資金調達に影響を及ぼして来ている状況に触れましたが、この背景には、湾岸の経済ハブを奪取したい MbS の野望があります。今年の元旦に、サウジ政府は政府案件への関与を望む外国企業の中東 HQ のサウジ移設を義務化し、年末までに大小 200 社以上がリヤドに地域本社を登録しましたが、その為に膨大な不動産需要が生じているのです。明らかに UAE の地域経済覇権奪取の野望を隠さない MbS に対し、かつて師匠格であった UAE の MbZ は警戒を強めています。

そうしたサウジアラビアの不動産開発事業の動きの中で目に留まったのがトランプインターナショナルとの繋がりで。トランプご本人は今やバイデン潰しに血眼ですが、娘のイバンカの同母弟

のエリックが仕切るトランプインターナショナルは、サウジの不動産開発最大手ダール・アル・アルカンの国際部門ダール・グローバルと提携し、オマーンのアイダでのリゾート開発を進めています。そして今般、ジェッダに「トランプタワー」を建設することにも合意しました。トランプタワーは、ドバイのパームアイランドに建てられるはずでしたが、2009年のドバイショックで中止されています。ちなみにオマーンのリゾートは右写真のとおり、崖から吊るされている「透明な寝室」が売り(!?)です。テラスや露天風呂みたいなプールも今にも海に落ちこちそうな感じですが、この手のスリルを味わいたい方にはサイコーです(さすがに床も透明ではないみたい)。11月の大統領選を念頭にしての開発ではないでしょうが、いずれにしてもサウジ側にトランプアレルギーはゼロです。



以上は民間の動きですが、当然サウジ政府の意向と強く結びついています。この点では UAE も負けてはいないと言うか、こと不動産についてはこちらもとんでもない規模と豪華さの住宅などで毎週記録更新の活況を呈していますが、UAE は AI にも着目し、その成果の一つとして政府系 AI 大手の G42 が、中国と縁を切ってマイクロソフトとの提携に舵を切り、15 億ドルの投資を受け入れて、システムを全面入れ替えることを決断したと言うのは前号でご報告しました。当初は BRICS に加盟したばかりの UAE が、中東の地政学的情勢が不安定化する中、安全保障はやはり米国頼みの現実に屈したのかと思ったのですが、生成 AI へのアクセスは米国技術を抜きにしては語れず、また米国としても湾岸に中国 AI 技術をこれ以上のさばらせることは許されず、マイクロソフトを通じて UAE との戦略的妥協を図った模様です。UAE は早くから AI 担当大臣を任命して AI 産業誘致戦略に取り組んで来ましたが、その成果がこの AI を通じた対米協力関係強化で、サウジアラビアの一步先を行く戦略的選択になったのではないかと思います。

その戦略性の発露として 5 月 22 日、両社の提携策として、ケニアにおける国家レベルでの包括的なデジタル投資パッケージが発表されました。折からケニアのルフト大統領が、アフリカ首脳として 20 年ぶりの米国公式訪問中で、その成果の一つとして米国・ケニア・UAE3ヶ国間で LoI が調印されました。UAE が米国の対アフリカ AI 戦略にちゃっかり乗った形ですが、実際 G42 が 10 億ドルの初期投資の取り決めを主導し、そのひとつが新設の「東アフリカクラウドリージョン」で Microsoft Azure を実行するための「グリーンデータセンター建設プロジェクト」です。同センターは地熱発電のみで稼働し、最先端の節水技術を装備する脱炭素かつ省エネのデータセンターで、アフリカに限らぬ次世代モデルとなるものです。そして東アフリカクラウドリージョンは、正式契約から 2 年以内に運用開始される予定ですが、この運用は地元のパートナーを巻き込みつつ、

- (1) 現地語の AI モデルの開発と研究、
- (2) 幅広い AI デジタルスキルトレーニングを含む東アフリカイノベーションラボ、

(3) ケニア内外との接続投資、

(4) 東アフリカ全体で安全でセキュリティの高いクラウドサービスをサポートするためのケニア政府との協力、

等々の4つの柱から成り立っています。

特に(1)については、ケニアの独自の文化的および言語的ニーズをサポートするために、G42 が Microsoft 経由 OpenAIを通じてですが、スワヒリ語と英語のオープンソースの大規模言語 AI モデルのトレーニングを開始したとの事です。ケニアでの高度な研究を加速するために、Microsoft と G42 は、Microsoft Africa Research Institute、Microsoft AI for Good Lab、アブダビの Mohammed Bin Zayed University of Artificial Intelligence、およびケニアと東アフリカで選ばれた大学を結んで、共同のコラボレーションと地元の大学へのサポートを強化するとの事です。これは学術の世界だけでなく、東アフリカの AI エコシステム構築に UAE がしっかり入り込むと言うことで、GCC がアフリカのゲートウェイとなる場合、UAE にとって大きなアドバンテージになるでしょう。こうした動きに、我が国はどのように突き刺されれば良いのでしょうか。

#### 【付録】 ChatGPT 開発と英大学の言語研究の思い出

日経新聞の AI 関連記事で、Chat GPT で作成された文章に「delve(深掘する、探求する)」と言う単語が急増していると言う記事がありました。Chat GPT 開発時に、適切な受け答えを学ぶため、人間と大量に対話の訓練をしたのですが、その相手と言うのが時給 2 ドル以下で雇われたアフリカの英語話者が多く、delve はナイジェリアなどで頻繁に使われていることから、アフリカの英語が Chat GPT の言語能力に影響を与えた可能性があるということです。

私は 40 年以上前にナイジェリアに駐在したのですが、確かに英国本国で使われていない古語が通用していると言う話を聞きました。例えば渋滞(traffic jam)のことを「go slow」と言うのですが、オクスフォード卒の英国人に尋ねたら、「確かに 19 世紀にはそう言う表現があった」と言うのです。英国の植民地支配時代に現地人は英語を強要された訳ですが、その際の言葉が今も生きていると言う訳です。ナイジェリア人は「thank you」をなかなか言わない。なぜならば(植民地時代に英国人から)言われたことが無いからだ、なんて冗談もありました。古い文語的表現はインド人の英語にもその傾向がありますが、過去の歴史に忖度せぬ ChatGPT が植民地時代の英語環境を前提に成長したらどうなるのか、その内歴史も覚えて反撥するのか等々、なかなか興味深いところです。

それ以前に英国のバーミンガム大学に留学した際には、英語力をアップしようと学内の英語教室に参加したのですが、教師から聞いた彼らの事業目的は教育ではなく(もちろんそれもやりますが)、集まった世界各地の学生たちの英語の特徴を収集すると言うものでした。経済のグローバル化に伴い、英語は世界標準語になると言う確信の下、その標準英語なるものは、話者の数に依存すると言う仮説です。即ちデファクトスタンダードの発想が、1970 年代の英国の大学には既にあ

ったのです。当時英国経済の低迷から如何に脱却するかシナリオ作りの中で、英語に対してもそのような姿勢でいることに、大英帝国の奥深さを見る思いがしたものです。

英語話者の人口数から言ったらインド系(パキスタン、バングラ、スリランカを含む)が圧倒的です。バーミンガム大学では6千万人に過ぎない英国人の英語(しかも方言多数)が、遠からずマイナーな存在になることを覚悟の上で、次世代の英語の姿を模索していたのです。(ちなみに日本人の英語は「受身形」が多いとの指摘がありました。)

しかし Chat GPT はインド英語にはならずアフリカ英語になりつつある。その理由がコストセーブと言うビジネスリズンであった訳ですが、その影響がどうなるかと言うところまで考えが回っていなかったことが「delve の異常繁殖」に繋がったと言えましょう。ChatGPT で英語に親しむ次世代の若者たちは、アフリカ英語に染まっていくのでしょうか。それはアフリカ人の言語優位性に繋がるのでしょうか。言葉は社会の鏡です。次世代の若者達のビジネス発想が、もしナイジェリア的になるのあれば、旧弊の政府には頼らず、個人のビジネスセンスに従い、次々と国境を超えた起業を行うバイタリティーが、国を超えて加速する姿が一般的になるかも知れません。

アフリカ英語だからダメと言うつもりはありませんが、生成 AI の成長に対する将来的懸念への倫理的考察が OpenAI の社内ではもともとあり、それがアルトマン CEO 解任騒動の一因であったことも考えると、delve の異常繁殖の影響が、今後学校教育を超越してじわじわと効いてくるかと思うと、なんだか空恐ろしくもなる次第です。

(と、書いていたら、「Delve AI」なる名前のソフトが既に出現していることに驚きました。企業がデータに基づいたバイヤーペルソナを迅速かつ簡単に作成できるように設計された AI 搭載ツールなのだそうです。 <https://ai-hikaku.com/tools/delve/> )

以 上

PS: イラン大統領決選投票で、改革派ペゼシュキアン候補が当選したニュース速報が飛び込んで来ましたが、今回は紙数もなく、次回にしたいと思います。